

十九の秋

永井荷風

青空文庫

近年新聞紙の報道するところについて見るに、東亜の風雲はますます急となり、日支同
 文の邦家ほっかも善鄰よの誼よしみを訂さだめている違いとまがなくなつたようである。かつてわたくしが年十
 九の秋、父母に従つて上シャンハイ海ハイに遊んだころのことを思い返すと、恍こころとして隔世の思いが
 ある。

子供の時分、わたくしは父の書齋や客間の床とこの間に、何如璋かじょしょう、葉松石しやうしやうせき、王漆おうしつ
 園えんなどという清朝人の書幅の懸けられてあつたことを記憶している。父は唐宋の詩文を好
 み、早くから支那人と文墨まじわりの交まじわりを訂さだめておられたのである。

何如璋は、明治十年頃から久しい間東京に駐ちゆうざつ割さつしていた清国の公使であつた。

葉松石は同じころ、最初の外国語学校教授に招しやうへい聘へいせられた人で、一度帰国した後、
 再び来遊して、大阪で病死した。遺稿『煮葉漫抄』の初めに詩人小野湖山おのこゝさんのつくつた略伝
 が載っている。

毎年庭の梅の散りかける頃になると、客間の床には、きまつて何如璋の揮毫きぎょうした東坡とうぱの
 絶句が懸けられるので、わたくしは老耄ろうもうした今日に至つてもなお能よく左の二十八字を暗
 記している。

梨花淡白柳深青

〔梨花は淡白にして柳は深青
りか は たんぱく やなぎ しんせい
りゆうじよ

柳絮飛時花滿城

柳絮の飛ぶ時 花 城に滿つ
ちゆうぢよう はなしろ みにみ

惆悵東欄一樹雪

惆悵す 東欄一樹の雪
ちゆうぢよう どうらんいちじゆ

人生看得幾清明

人生 看るを得るは幾清明ぞ
じんせい み いくせいめい

何如璋は明治の儒者文人の間には重んぜられた人であったと見え、その頃刊行せられた日本人の詩文集にして何氏の題字や序または評語を載せないものは殆どない。

わたくしが東京を去つたのは明治三十年の九月であったが、出帆の日もまた乗込んだ汽船の名も今は覚えていない。わたくしは両親よりも一步先に横浜から船に乗り、そして神戸の港で、後から陸行して来られる両親を待合したのである。

船は荷積をするため二日二晩碇泊しているので、そのあいだに、わたくしは一人で京都大阪の名所を見歩き、生れて初めての旅行を娛しんだ。しかしその時の事は、大方忘れてしまった中に、一つ覚えているのは、文楽座で、後に撰津大掾になった越路太夫の、お俊伝兵衛を聴いたことだけである。

やがて船が長崎につくと、薄紫地の縞の長い服を着た商人らしい支那人が葉巻を啣えながら小舟に乗って父をたずねに来た。その頃長崎には汽船が横づけになるような波止場は

なかつた。わたくしは父を訪問しに來た支那人が帰りがけに船梯子ふなばしごを降りながら、サンパンと叫んで小舟を呼んだその声をきき、身は既に異郷にあるが如き一種言いがたい快感を覚えた事を今だに忘れ得ない。

朝の中長崎うちちについた船はその日の夕方近くに纜ともづなを解き、次の日の午後ひるすぎには呉淞ウースンの河口に入り、暫く蘆荻ろてきの間に潮待ちをした後、徐おもむろに上海の埠頭はとばに着いた。父は官を辞した後のち商となり、その年の春頃から上海の或会社の事務を監督しておられたので、埠頭に立っていた大勢の人に迎えられ、二頭立だての箱馬車に乗った。母とわたくしも同じくこの馬車に乗ったが、東京で鉄道馬車の瘦せた馬ばかり見馴れた眼には、革具かわぐの立派な馬がいかにも好い形に見えた。馭者ぎよしゃが二人、馬丁ばていが二人、袖口そでぐちと襟えりとを赤地に拵こしらいの白服に、赤い総ふさのついた陣笠じんがさのようなものを冠かぶっていた姿は、その頃東京では欧米の公使が威風堂々と堀端を乗り歩く馬車と同じようなので、わたくしの一家は俄にわかにえらいものになったような心持がした。

会社の構内にあつた父の社宅は、埠頭はとばから二、三町とは離れていないので、鞭むちの音をきくかと思うと、すぐさま石塀いしべに沿うて鉄の門に入り、仏蘭西風フランスの灰色した石造りの家の階段しほまに駐とまった。

家は二階建て、下は広い応接間と食堂との二室である。その境の引戸を左右に明放つと、舞踏のできる広い一室になるようにしてあった。階上にはベランダを廻らした二室があつて、その一は父の書齋、一つは寢室であるが、そのいずれからも坐ながらにして、海のような黄浦江の兩岸が一目に見渡される。父はわたくしに裏手の一室を与えて滞留中の居間にさせられた。この室にはベランダはなかったが、バルコンのついた仏蘭西風の窓に凭ると、芝生の向に事務所になつた会社の建物と、石堀の彼方に道路を隔てて日本領事館の建物が見える。その頃には日本の租界はなかつたので、領事館を始め、日本の会社や商店は大抵美租界の一隅にあつた。唯横浜正金銀行と三井物産会社とが英租界の最も繁華な河岸通にあつたのだという。

美租界と英租界との間に運河があつて、虹口橋とか呼ばれた橋がかかつていた。橋をわたると黄浦江の岸に臨んで洋式の公園がある。わたくしは晚餐をすましてから、会社の人に導かれて、この公園を散歩したが、一時間あまりで帰つて来たので、その道程は往復しても日本の一里を越してしまいと思つた。

やがて裏手の一室に這入つて、寢に就いたが、わたくしは旅のつかれを知りながらなかなか寐つかれなかつた。わたくしは上陸したその瞬間から唯物珍らしいというよりも、何

やら最少し深刻な感激に打たれていたのであった。その頃にはエキゾチズムという語はまだ知ろうはずもなかったので、わたくしは官覚の興奮していることだけは心づいていながら、これを自覚しこれを解剖するだけの智識がなかったのである。

しかし日に日に経験する異様な感激は、やがて臆ながらも、海外の風物とその色彩とから呼び起されていることを知るようになった。支那人の生活には強烈なる色彩の美がある。街を歩いている支那の商人や、一輪車に乗って行く支那婦人の服装。辻々に立っている印度人の巡査が頭に巻いている布や、土耳其人の帽子などの色彩。河の上を往来している小舟の塗色。これに加うるに種々なる不可解の語声。これらの色と音とはまだ西洋の文学芸術を知らなかつたにもかかわらず、わたくしの官覚に強い刺戟を与えずにはいなかつたのである。

或日わたくしは、銅羅を鳴しながら街上を練り行く道台の行列に出遇つた。また或日の夕方には、大声に泣きながら歩く女の列を先駆にした葬式の行列に出遇つて、その奇異なる風俗に眼を見張つた。張園の木の間に桂花を簪にした支那美人が幾輛となく馬車を走らせる光景。また、古びた徐園の廻廊に懸けられた聯句の書体。薄暗いその中庭に咲いている秋花のさびしさ。また劇場や茶館の連つた四馬路の賑い。それらを見るに及んで、異

国の色彩に対する感激はますます烈しくなった。

大正二年革命の起つてより、支那人は清朝二百年の風俗を改めて、われわれと同じように欧米のものを採用してしまつたので、今日の上海には三十余年のむかし、わたくしが目撃したような色彩の美は、最早や街路の上には存在してないのかも知れない。

当時わたくしは若い美貌の支那人が、辮髪べんぱつの先に長い総ふさぎのついた絹糸を編み込んで、歩きたびにその総の先が繻子の靴の真白な踵かかとに触れて動くようにしているのを見て、いかにも優美織せんこう巧なる風俗だと思つた。はでな織模様のある緞子の長衣の上に、更にはでな色の幅びろい縁ふちを取つた胴衣かきを襲ね、数の多いその釦ボタンには象眼細工ぞうがんさいくでちりばめた宝石を用い、長い総のついた帯には繻取りぬいとのあるさまざまの袋を下さげているのを見て、わたくしは男の服装の美なる事はむしろ女に優まさっているのを羨うらやましく思つた。

清朝の暦法はわが江戸時代と同じく陰暦を用いていた。或日父母に従つて馬車を遠く郊外に馳はせ、柳あしと蘆あしと桑ばかり果しなくつづいてゐる平野の唯中に龍華寺りゅうげじという古刹こせつをたずね、その塔の頂に登つた事を思返すと、その日はたしかに旧暦の九月九日、即ち重陽ちやうようの節句に當つていたのであろう。重陽の節に山に登り、菊の花または茱萸ぐみの実を摘つんで詩をつくることは、唐詩を学んだ日本の文人が、江戸時代から好んでなした所である。

上海の市中には登るべき岡阜こうぶもなく、また遠望すべき山影もない。郊外の龍華寺に往ゆきその塔に登つて、ここに始めて雲烟うんえん渺々びょうびょうたる間に低く一連の山脈を望むことができるのだと、車の中で父が語られた。

昭和の日本人は秋晴れの日、山に遊ぶことを言うにハイキングとやら称する亜米利加語アメリカを用いているが、わたくしの如き頑民に言わせると、古来慣用せられた登高とうこうの一語で足りている。

その年陰曆九月十三夜が陽曆のいつの日に当たっていたか、わたくしは記憶していない。しかしたまたまこの稿を草するに当つて、思い出したのは或夜父が晚餐の後、その書齋で雑談しておられた時、今夜は十三夜だと言つて、即興の詩一篇を示された事である。その詩は父の遺稿に、

蘆花如雪雁声寒

〔蘆花ろかは雪の如く、雁かりの声は寒し

把酒南楼夜欲残

南楼なんろうに酒を把とり、夜残よめこらんと欲ほつす

四口一家固是客

四口しこうの一家は固もつとより是これ客なり

天涯俱見月团欒

天涯てんがいに俱ともに見る月も团欒だんらんす

としてゐる。

わたくしはこのまま長く上海に留^{とどま}って、適当な学校を見つけて就学したいと思つた。東京に帰ればやがて徴兵検査も受けなければならず。また高等学校にでも入学すれば柔術や何かをやらなければならぬ。わたくしにはそれが何よりもいやでならなかつたのである。しかしわたくしの望みは許されなかつた。そしてその年の冬、母の帰京すると共に、わたくしもまた船に乗つた。公園に馬車を駆^かる支那美人の簪^{かざし}にも既に菊の花を見なくなつた頃であつた。

凡ては三十六、七年むかしの夢となつた。歲月人を俟^またず、匆^{そうそう}々として過ぎ去ること
は誠に東坡^{とうば}が言うが如く、「惆^{ちゆう}悵^{ちやう}す東欄一樹の雪。人生看るを得るは幾^{いくせい}清明^{せいめい}ぞ。」
である。

甲戌十月記

青空文庫情報

底本：「荷風随筆集（下）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年11月17日第1刷発行

2007（平成19）年7月13日第23刷発行

底本の親本：「荷風随筆 一〜五」岩波書店

1981（昭和56）年11月〜1982（昭和57）年3月

※「漢詩文の訓読は蜂屋邦夫氏を煩わした。」旨の記載が、底本の編集付記にあります。

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2010年3月8日作成

2010年11月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

十九の秋

永井荷風

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>